

2014 大阪市ふれあい水泳大会

【目的】 本大会は「障がいのある人が日頃の練習の成果を示す場を提供することにより、意欲と自信を養うとともに、友好と親睦を図り、また健康の維持増進、体力の向上や社会参加の機会とすることを目的とします。」（実施要項より抜粋）

平成26年9月23日（火・祝）大阪市舞洲障がい者スポーツセンターにおいて、大阪市ふれあい水泳大会が行われた。種目は年齢区分別で、すべてタイムレースで行われた。

種目は、自由形25m・50m、背泳ぎ25m・50m、バタフライ25m、100mリレー、介助者つき25m自由形、浮上具つき25m自由形、めざせ完泳！！25m自由形がある。

速いタイムの人もいれば、マイペースで頑張って完泳する人もいる。どちらも感動し元気をもらった。大会参加人数は319名で、日頃の練習の成果が出せてみんな大健闘であった。

ボランティアに協力する団体もたくさんあり、大阪障害者スポーツ指導者協議会からも大勢の人が参加した。

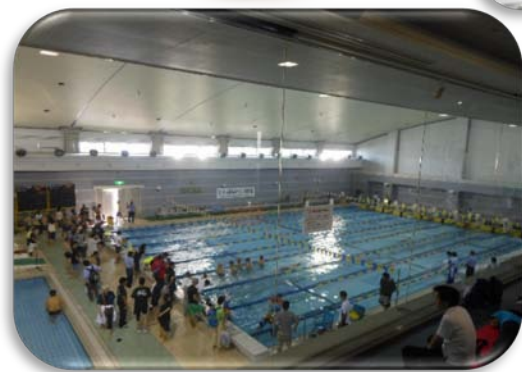
（広報・松浦）

大会前の準備



受付

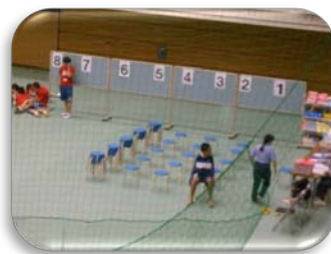
2F 観覧席



大会前の練習



招集場所



選手控え場所



（広報部）

★今年度より、ホームページを広報が担当する。情報や写真等は、できる限り速く発信できるように頑張りたい。

★恒例であった、なみはやドームのジャパンパラ水泳競技大会が、来年からは大阪でないので本当に寂しい。来年の大会も、協議会だよりに掲載伝えることができればと思う。

★年次総会の基調講演は、なかなか経験できない空間を聞くことができ大変良かった。講演は、指導者協議会の行事としても数少ないひとつになる。なので、たくさんの参加を望みます。

編集後記

協議会だより

平成26年 9月 30日 第72号

発行・編集 大阪障害者スポーツ指導者協議会 広報部

大阪市東住吉区长居公園1-32 大阪市長居障害者スポーツセンター内

FAX 06-6697-8613

<http://osaka-adspo.org/>

【報告】大阪障害者スポーツ指導者協議会 平成25年度年次総会

場所：大阪府教職員互助組合 たかつガーデン 3階 会議室「ローズ」

◎平成25年度 事業報告について

1 事務局

- ① 理事会の開催：協議会の運営体制やボランティア協力体制の調整を行うため理事会を14回開催した。
- ② 大阪府内の障がい者スポーツ大会・イベントに協力を行った。
- ③ 第13回全国障害者スポーツ大会への参加
- ④ 全国障害者スポーツ指導者協議会への出席

2 研修部

・研修を開催

平成26年3月8日（土）障がい者スポーツにおける「知的障がい者、発達障がい者の理解」

3 広報部

・広報紙「第70号」「第71号」を発行

4 研修部

・平成25年10月6日（日）「第2回スポーツいろいろカーニバル」を開催

◎平成26年度 事業計画（案）について

1 事務局

・各種ボランティアの要請・各種発送業務について迅速の対応・対処することとしたい。また、協議会の会員が意欲的にボランティア活動やスポーツ指導をして頂けるよう努力したい。

2 広報部

・ホームページ作成を広報が作成担当する。協議会だよりは、年2回発行する。

3 研修部

・障害者スポーツ指導の実践で役立つ内容と、日本障がい者スポーツ協会が定める競技種目を中心にした研修を、年1～2回行いたい。

4 企画部

・大阪障害者スポーツ指導者協議会として、障がい者スポーツのイベントや大会が行えるような企画・案を考え実行できるよう努力したい。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|------|-------|-------|------|-----------|
| 長谷川 言一 | 菅原 智彦 | 相原 繁樹 | 松田 恭子 | 松浦 春代 | 永島 久義 | 中野 薫 | 福西 拓也 | 加島 多美子 | 仲本 清文 | 兼田 理香 | 新川 豊美 | 福島 美沙季 | 久保 連 | 川本 敏一 | 鈴木 光一 | 松本 晃 | 平成26年度 役員 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|------|-------|-------|------|-----------|

総会基調講演

冬季障害者スポーツとパラリンピック

～ソチパラリンピックに参加して～

白庭病院 副院長・整形外科 関節センター長
日本障がい者スポーツ協会 医学委員

講師 **小林 章郎 氏**



ソチパラリンピック開会式や、
選手の試合の様子など動画を観ながら、
普段私たちがなかなか経験できない、
いろいろなお話を頂きました。



障害者スポーツの始まり

- ・1910年 ドイツ 聴覚障害者スポーツ協会が創設
- ・第一次世界大戦(1914～1917年)
- ・イギリス 身体障害者自転車クラブや英国片上肢ゴルフ協会が創立
- ・1951年(昭和26年)
- ・東京都 身体障害者によるスポーツ大会
- ・1962年(昭和37年)
- ・第11回国際ストック・マンデビル競技大会に2名の選手が初めて海外に派遣

障害の種類

- ・身体障害
- ・肢体不自由
- ・脊髄損傷、脳血管障害、脳性麻痺、切断
- ・視覚障害
- ・聴覚・言語障害
- ・内部障害
- ・循環器、呼吸器、腎、肝疾患、糖尿病
- ・知的障害

パラリンピックの歴史

- ・1924年 パリ 聴覚障害者の第1回国際スポーツ大会
- ・1944年 チャーチル首相 ストック・マンデビル病院内に脊髄損傷科(Spinal Unit)を開設 初代科長に、1939年にナチスによるユダヤ人排斥運動によりイギリスに亡命した医師、ルードウィッヒ・グットマン卿
- ・1948年 ロンドンオリンピックに合わせてストック・マンデビル病院内で16名(男子14名、女子2名)の車椅子患者(英国退役軍人)によるアーチェリー大会を開催
- ・1952年 第1回国際ストック・マンデビル大会(130名が参加)
- ・オランダの参加
- ・1960年 国際ストック・マンデビル大会委員会(ISMGC)が設立
- ・同年、オリンピックの開催されたローマで国際ストック・マンデビル大会が開催された(23ヶ国、400名が参加)
- ・第1回パラリンピック
- ・1964年 ストック・マンデビル競技大会を東京オリンピックの後に開催し、これを第2回パラリンピック大会とした

アンチドーピング

- ・1999年 国際パラリンピック委員会は国際オリンピック委員会と契約を結び、規則をIOCに準ずることを決定
- ・アンチ・ドーピング規則を遵守する
- ・禁止薬物・方法の基準
- ・禁止薬物・方法の基準は世界ドーピング防止機構(WADA)の基準と同様
- ・国際パラリンピック委員会(IPC)は障害者特有の症状に対して特別な配慮がされているものもある(例：導尿の際のカテーテル使用)
- ・治療目的使用の適用措置(Therapeutic Use Exemptions：TUE)
- ・障害に伴う合併症や随伴症状のために、禁止薬物、方法を使用せざるを得ない場合には、事前にTUE申請
- ・障害者は薬物を使用する者が多く、TUE申請の方法を知っておく必要がある

原疾患の評価

- ・ICIDH(国際障害分類、1980年)
- ・障害を以下の3階層に分類
- ・Impairment(機能、形態障害=障害の臓器レベルでの評価)
- ・Disability(能力障害=行動レベルでの評価)
- ・Handicap(社会的不利)
- ・全盲の人が新聞を読めない
- ・目という臓器に障害があること(Impairment)
- ・字が読めないこと(Disability)
- ・新聞を読めないために情報を入手できない(Handicap)

脊髄損傷

- ・車椅子スポーツ(バスケット、陸上、テニス)
- ・シットスキー、スレッジホッケー
- ・Impairment
- ・アメリカ脊髄損傷協会(ASIA)の分類
- ・損傷高位—不可能な種目もある
- ・損傷程度(完全、不完全)
- ・痙攣、褥瘡、排尿機能(管理)、消化器症状
- ・Disability
- ・車椅子の操作能力、日常生活の動作の自立

脊髄損傷の原因

- ・衝突、転落など強い外力
- ・交通事故、労災事故、スポーツ
- ・脊椎、脊髄の損傷
- ・受傷時にほぼ運命は決まっている
- ・高位診断

アルパンスキー 座位の機能的クラス分け

- 6機能テスト Test1 (上肢) ・Test2 (体幹前屈)
- ・Test3 (体幹後屈) ・Test4 (体幹回線)
- ・Test5 (傾け) ・Test6 (ポール)



脳血管障害(片麻痺)

- ・脳梗塞、脳出血 基礎疾患—高血圧、動脈硬化
- ・Impairment
- ・麻痺の程度(回復程度) 言語障害
- ・高次機能障害(失行、失認)
- ・運動器合併症(反張膝、下垂足、肩亜脱臼)

脳性麻痺

- ・受胎から生後4週の間におこった脳に非進行性病変
- ・頻度：出生1000に対し2.0
- ・Impairment
- ・病型(痙性麻痺、アテトーゼ、筋強直、失調)
- ・障害範囲(単麻痺、片麻痺、対麻痺、四肢麻痺)
- ・活動性の評価、合併障害(知的障害、言語障害、難聴、てんかん)の評価

アルパンスキー視覚障害者のクラス分け

| | 視力 | 視野 |
|-------------|-----------|----------|
| ・B1 Log Mar | 2.60 | |
| ・B2 Log Mar | 1.50—2.60 | 5° 未満 |
| ・B3 Log Mar | 1—1.40 | 5—20° 未満 |

アルパンスキー 立位のクラス分け

- ・LW1 両下肢障害(両大腿切断)2本スキー
- ・LW2 片下肢障害(片大腿切断)1本スキー
- ・LW3 両下肢障害(両下腿切断)2本スキー
- ・LW4 片下肢障害(片下腿切断)2本スキー
- ・LW5/7 両上肢障害 ストックなし
- ・LW6/8 片上肢障害 1本ストック
- ・LW9 片上下肢障害 片麻痺

アルパンスキー座位のクラス分け

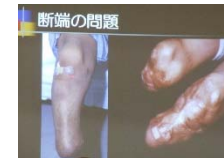
- シットスキー・LW10 腹筋機能なし
- ・LW11 上部腹筋機能あり
- ・LW12 腹筋機能あり

ICF (International Classification of Functioning Disability and Health 国際生活機能分類)

- ・2001年第51回WHO総会
- ・ICIDHの改訂版という位置づけ「人間の生活機能と障害の分類法」
- ・WHO国際障害分類(ICIDH)がマイナス面を分類するという考え方が中心であったのに対し、ICFは生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えた
- ・心身機能(body functions) 身体構造(body structures)
- ・機能障害(構造障害を含む) (impairments) 活動(activity) ・参加(participation)
- ・活動制限(activity limitations) 参加制約環境因子(environmental factors)

切断

- ・外傷(戦争)
- ・Impairment
- ・切断高位(部位)
- ・原因 外傷 血行障害 感染症 腫瘍
- ・断端部の状態 - 皮膚損傷、循環状態
- ・幻肢痛
- ・Disability 義肢との適合性



切断者の最小障害

- ・アルパンスキー
- ・IPCルールブック
- ・下腿切断 LW4
- ・足関節離断(サイム)
- ・レントゲンのチェック
- ・機能的クラス分け
- ・車いすバスケットボール
- ・シットスキー



クラス分けの基本

- ・選手の病的状態
- ・Impairment 歴史的
- ・機能的クラス分け
- ・車いすバスケットボール
- ・シットスキー

冬季の障害者スポーツ

- ・冬季パラリンピックの正式種目
- ・アルパンスキー
- ・ノルディックスキー
- ・クロスカントリースキー
- ・バイアスロン
- ・アイススレッジホッケー
- ・車いすカーリング

Classification

- ・アルパンスキー
- ・ノルディックスキー
- ・視覚障害
- ・立位
- ・座位

公平性と競技性の矛盾

- ・歴史的には各種目、男女でそれぞれ13カテゴリー
- ・13個の金メダル 競技性の低下
- ・Handicap System(Factor System)の導入
- ・RHC - KREK - System(Realistic Handicap Competition and Creative Result Control)
- ・過去の国際大会の成績をもとに算出
- ・3カテゴリーシステム
- ・Torino Paralympics 2006
- ・1種目に3個の金メダル
- 視覚障害 立位 座位

ソチ2014パラリンピック冬季競技大会

- ・2014年3月7日～16日
- ・競技
- ・ローザ・コテル
- ・アルパンスキー
- ・ラウラ
- ・クロスカントリースキー
- ・バイアスロン
- ・参加国 45か国・地域 選手692名
- ・日本選手団人数 55名(選手20名、役員35名)
- ・金3、銀2、銅1

帯同医の仕事

- ・選手、役員の健康管理、診断、治療
- ・クラシフィケーション
- ・ドーピングコントロール対応
- ・会場でのサポート
- ・各種会議出席
- ・アクシデント対応

今後の展望

- ・2020年 東京パラリンピック
- オリンピックと合同の組織委員会
- ・2018年 平昌パラリンピック

2014 ジャパンパラ水泳競技大会

平成26年7月20日(日)～21日(月・祝)(19日(土)クラス分け・練習)に、大阪府立門真スポーツセンター なみはやドームで2014 ジャパンパラ水泳競技大会が行われた。

『障がい者の水泳競技の競技力向上を図るため、国際規則に則った高いレベルの競技会を開催し、国内の水泳競技への志向意欲をより高めるとともに、広く社会参加の促進に資することを目的とする。』(開催要項より抜粋)

全国から参加した選手(資格条件を満たす者)は、緊張した面持ちで試合に臨んでいた。会場2階の受付では、アンチ・ドーピング活動のコーナーもあり、簡単なクイズに答えながら活動内容を理解することができた。この競技会は、ドーピング検査対象の大会であるため参加した選手は検査対象者となる。

大会ボランティアとしては、会場の準備や大会当日の進行を各団体とともに大阪障害者スポーツ指導者も協力を行った。

平成10年に会場が「なみはやドーム」に変わり17年続いた大阪での大会は、今回が最後となった。来年から東京で行われる。

ジャパンパラ水泳競技大会は「なみはやドーム」と定着し、大阪障害者スポーツ指導者も時期が来ればボランティアの準備をはじめていた。

全国から参加する選手と、間近に接することもできボランティアのテンションも上がった。寂しくはなるが応援したい。

大阪障害者スポーツ指導者の皆さん、会場が遠くになってしまいますが日程に都合がつかずらば、ぜひ来年もボランティアに参加してください。(広報：松浦)



2階の受付、選手の受付と別れ、指導者協議会の方が担当しました。毎回の大会に参加されています♡

たくさんの選手たちが競った、なみはやドーム。17年間ありがとうございました♡



2014ジャパンパラ水泳競技大会に参加して

南野 克江

2014年7月20日(日)、大阪なみはやドームでジャパンパラ水泳競技大会が開催されました。久しぶりのボランティア参加でした。あの選手は今年も来ているのだろうか？

新しい伸び盛りの選手はどうだろうか？ いろいろ期待に胸をはずませて行きました。

今回、私は受付になり選手たちに、間近で会えるという楽しみをもらいました。

8時半、正面玄関が開いて選手たちが入ってきました。その表情はこれからはじまる試合にむけて、「さあ やるぞ！」と生き生きと輝いてとてもまぶしかった。

参加している選手たちが、充分成果をだせるように私たちができることはなんだろう

試合がはじまり、ひときわ大きな歓声、大会新記録樹立、彼らは日本を代表するトップアスリートなのです。

2日間の試合後、予選通過できずに残念な思いをした人、今までの練習が実を結んだ人などさまざまな表情を見せてもらいました。でも、選手たちは次を見ていました。

スポーツは人に希望をあたえるのかな

私はボランティア参加して、いろんな人に会いとても楽しい思いや、元気をもらっています。

人間は1人ではなく皆で支えあっているということを今回も教えてもらい、また来年も応援に行こうと思いつつ帰りました。いつも 夢をありがとう♡

ボランティアに参加しました😊

IPC 公認 2014 ジャパンパラ水泳競技大会に参加して

福島 美沙季

平成26年7月20日(日)と21日(月)に大阪府門真市にあるなみはやドームで、2014 ジャパンパラ水泳競技大会が開催されました。

過去にパラリンピック出場を経験された選手のほか、若手の選手が競技に打ち込む姿をみることができ、私にとって心に残る思い出となりました。

今回、私は大会の競技補助としてプール入水・退水のサポートを行いました。

初めて参加させて頂きとても緊張しましたが、先輩指導員とともに選手の補助に関わることができました。プールの入水・退水の補助は、安全にそして効率のよい補助が行えるように、個々に応じた方法を選手やコーチと相談しながら行います。介助の方法だけではなく、選手への声かけや選手ひとりひとりに応じた細かい気配りなどさまざまな場面で学ぶことができました。

大会を通じて感じたことは、競技に参加する選手だけではなく、大会の運営や選手サポートしているスタッフが生き生きと活動されていたことです。活動を通して障がいの特性や理解、障がい・競技別の指導方法を身につけることができ、私自身も指導員としての関わりを見直す機会となりました。

今後も、さまざまなスポーツ教室や大会に参加することで指導経験を積むとともに、障がいのある方が積極的な社会参加ができるよう、そして障がい者スポーツの楽しみを一人でも多くの人に伝えられるよう関わっていきたいと思います。